伊勢市長賞

「ぼくのおおばあちゃん」

修道小学校　三年　小山（こやま）　陽向（ひなた）

おおばあちゃんは、ぼくのお母さんのおばあちゃんです。四月に、九十五才でなくなってしまいました。

子ども園からおばあちゃんの家に帰ると、いつも、

「ひなた、ひなた。」と言ってくれました。

昼間は、リビングで横になって、テレビを見たりねむったりしていました。紙パンツをはいていて、足も弱っていて、家の中でつえをついていました。ぼくは、いろいろなことをたのまれました。

「お茶ちょうだい。」

「新聞とって。」

とかたのまれました。そんな時、ぼくがわたしてあげると、すごくよろこびました。

その時、ぼくはうれしかったです。もっと

いろんなことをしてあげようと思いました。
ぼくが小学生になる前に、会えなくなったけれど、ときどき（ろう人）ホームに行ってあげました。
おおばあちゃんがなくなった時は、コロナがはやっている時で、ぼくとお兄ちゃんはおそうしきに行くことができませんでした。
元気でもっとながく生きてほしかったです。さいごに顔を見せておわかれがしたかったけどできませんでした。それで、お兄ちゃんと二人で手紙を書いて、お母さんにたのみました。その手紙は、おじいちゃんが読んでくれたそうです。おおばあちゃんはきっとよろこんでくれたと思います。
おおばあちゃんは、もういないけれど、おばあちゃんの家には、にこにこしている顔じゃしんがかざってあります。ぼくは、いろんなことをしてあげて、もっともっとたすけてあげたかったです。